

## 人身売買の現状と法的課題

人身売買禁止ネットワーク共同代表

大津 恵子

### HELPが抱えている課題

私がやってきましたことを少し話し、そのなかで人身売買の問題をお話ししたいと思います。「人身売買ってなに？ いまそんなことがあるの？」と私はいろいろな人から聞かれますが、気がつかないだけです。

皆さん、からゆきさんのことを聞いたことがありますか。からゆきさんは一〇〇年前に中国大陸、シベリア、東南アジア諸島、インド、アフリカ方面まで出かけた海外売春婦のことです。「サンタカン八番娼館」（山崎朋子著）という映画や本のなかで海外で売春した女性たちの苦労話が描かれています。

私とその女性たちと出会ったのはシンガポールのお墓です。シンガポールにあるからゆきさんのお墓は石だけがあったそうです。名前も何もない。そのときに使われた名前が石に書かれているのですが、シンガポールに住んでいる日本人会の方たちよって整備されました。それで初めてからゆきさんという人たちのことを知りました。

からゆきさんが日本に帰ってくるように運動したのが一二〇年の歴史をもつ私達の母体である日本キリスト教婦人矯風会の女性たちです。当時の政府に、「帰還させて欲しいと言うのならからゆきさんが帰ってくる施設をつくったかどうか」と言われ、矯風会の女性たちは全国に呼び掛け一三〇〇坪の土地を買い、そこに慈愛館を建て、そしてか

らゆきさんが負った苦しみの歴史を継承して現代の課題としてきました。貧しい女性たちが売春婦として売られることを禁止するための廢娼運動を起こし、六〇年前に婦人の参政権を勝ち取るために働いてきた団体が日本キリスト教婦人矯風会です。そして五〇年前には売春防止法の制定のために戦いました。

その日本キリスト教婦人矯風会がつくったのが女性の家HEL Pです。国籍を問わず、ビザがなくても行くところがなければHEL Pを利用できます。二〇年間で大人が約四〇〇〇名、子供が約一〇〇〇人入ってきました。HEL Pというのは助けてくれのHEL Pです。しかし、そのなかのHはhouse、Eはemergency、Lはlove、Pはpeace、愛と平和のある緊急避難所ということでこの名前が付けられました。loveとpeaceがなければ単なる宿泊所に過ぎない、love & peaceが大切であるということです。

## 人身売買被害者の声

私がなぜ外国籍の女性たちを支援するようになったのかを少しお話しします。私は一九九一年にタイから大阪に帰ってきて、京都YWCAのAPT (Asian People Together) で電話相談を始めました。そのきっかけになったのは、警察に保護された一人のタイ人女性が入所してきた大阪のカトリック教会の支援センターからの「タイ語ができる人がいないので来てもらえないか」という電話でした。

私が支援センターに行きますと、広い部屋に女性が一人ポツンと座っていました。私がsawat dii kha、タイ語で「こんにちは」と挨拶をすると、彼女の顔がパッと明るくなって、タイ人独特のかわいらしい笑顔が返ってきました。「どうしたの」と聞くと、「日本に来るまで売春をするなんて思いもよらなかった、日本に来れば縫製工場で働いて一カ月一〇万円もらえると聞いて来た。」と言うのです。

一〇万円というのは彼らにとつては四、五カ月の給料です。なぜ日本に行こうと思ったかというと、海外出稼ぎの人たちによって北タイや東北タイの貧しい農村に立派な家が建てられていた。「日本に行けばあんなきれいな家が建てられるよ」と言われて行くことを承知したそうです。

日本にきた途端にパスポートもＩＤカードも少しの所持金もすべて取られて、あなたには借金が三五〇万円あると言われたのです。そのとき三五〇万円というのがどれぐらいの価値があるか知らなかった。一週間たち、二週間すると、一万円がものすごく大きな価値だということがわかってきた。それが三五〇万円です。

一万円を一枚という数え方をして、三五〇枚の借金があると言われたそうです。航空運賃からビザを申請するパスポートをつくるお金が三五〇万円ぐらいかと思つた。ところが、生活していくと、三五〇枚というのはものすごく大きなお金だと気がついた。それから、「売春をしろ」と言われた。「いやだ、私はそんなことで来たのではない」とスナックのママに言つたそうです。すると、殴る、蹴るで、それをしなければどうしようもない状況に置かれたそうです。

皆さんはDV（ドメスティックバイオレンスの略）の話を聞いたことがありますか。女性に対する暴力、特に配偶者や恋人間の暴力によつて女性たちがなぜ逃げられない状況にあるのか。言うことを聞かなければ暴力を受け、体がコントロールされていく状況です。私は人身売買の問題がわかり、更にDVの問題がよくわかりました。そのことをしなければ再び暴力を受けるので聞かざるを得なくなる、ということなのです。

それで、彼女は泣く泣く売春をしたそうです。アパート、スナック、ホテルのトライアングルを毎日繰り返し返したそうです。毎日あまりも泣くので、先輩たちが逃がす計画を立ててくれました。

彼女は私に、「私は日本に来てから人間らしい扱いを受けていなかった。私は人間なのです」と言つたのです。そ

れがあまりにも強烈な言葉だったものですから、外国から来た人たちのサポートが何かできないかと思い、外国の電話相談 APT にかかわるようになりました。

いろいろな事件がありました。あるときは交通事故に遭った女性から電話がかかってきました。また、タイ人のコックはもらった給料が契約の半分だったということで、会社との交渉をしました。

九一〜九三年にかけてタイ人の巻き込んだ殺人事件が起きました。

彼女は住んでいる村で村の人や友人・知人によって勧誘されて、バンコクに行き、そこでパスポートを作りました。それから、直接日本に来るのではなくて、いろいろな国を経由して日本にきます。なぜかという、直接日本に来ると、この人は日本で働くのではないかと思われるからです。HELP に来る人にもシンガポール、マレーシア、ヨーロッパを通して日本に来た人たちがいます。こういう経緯のなかで、女性たちはさまざまなところへ行つて、やつと日本に来るわけです。それだけいろいろな人の手を借りると、借金がどんどん膨れ上がります。

その女性もこういう経緯のなかで日本にきました。タイの場合、北タイや東北タイから来る女性が多いのです。そして、架空の借金を課せられる。その置かれた状況があまりにもひどいので、九一〜九三年にママさん殺しが起こりました。千葉の茂原と市原、東京の新小岩、そして有名なのは茨城県の下館、道後、大阪。いろいろな事件が起こりました。その背景にあるのは、あまりにも厳しい売春の強要と暴力とその背後にいる暴力団です。下館事件もそうですが、茂原事件でも彼女たちが逃げ出したときに、全国に彼女の写真がばらまかれて、やくざにその地に連れ戻されたそうです。

私がかかわった殺人事件だけで六件ありますが、その女性たちが言ったことは、人間としてではなく商品として扱われたということです。女性たちが逃げようと思ったときに、ママさんを殺さなければ自分が殺されるかもしれない

と思ったそうです。そのような、事件と殺人事件が約二〇件起きたと言われています。そのなかで私は大阪事件と茂原・市原の事件の裁判支援をいたしました。私はママさんを殺した加害者である女性の裁判支援をしました。それはなぜかという点、その女性たちが置かれた状況があまりにも厳しく自分の身を守るために女性（ママさん）を殺したわけです。そのなかで弁護士も支援団体も手弁当でその女性の裁判を支援いたしました。

拘留所に入れたときに私は面会に行きました。私はその女性を通して拘留所内での外国籍の人と日本人との違いを知りました。私たちが面会に行くとき日本語でしゃべるようにと書かれています。弁護士が面会するときには通訳者がつきますから母国語でしゃべることができそうですが、私が面会に行つてタイ語でしゃべろうとするとストップがかかるのです。タイ語しかわからない人に、どうやって日本語でしゃべるのか。タイ語と日本語をまぜてしゃべろうとすると、監視官の方から「タイ語でしゃべったら出て行ってもらいます」と言われます。それで、彼女は日本語を勉強しました。最初に差し入れたのが辞書です。どんどん日本語を覚えていきました。

それから、ジャージのような洋服を差し入れると、ひもは、首を吊る道具に使われるかもしれないということでひもというひもを全部抜かれました。キルティングの洋服は、キルティングのなかに針などが入っていたらいけないので全部ほいてもいいですか、と言われます。縫糸を抜かれたらチャンチャンコなんて何の役にも立ちません。

拘留所が刑務所と違うのは、拘留所のなかで全部自分で必要な物を買わなければならないということです。ですから、私は毎月三〇〇〇円の差し入れをいたしました。それから、冬でも拘留所は暖房が入っていませんので、湯たんぽのお湯を買ったそうです。一番大変なのは通訳です。私たちが日本語で手紙を書いたり、タイ語で手紙を書いたりしても、彼女のもとには翻訳されて、チェックされて届きますから一カ月、二カ月かかりました。

私はそういう拘留所の面会や裁判を通して人身売買の被害者の状況を知ることができました。女性たちは裁判を通

して人間の尊厳の回復を訴えました。彼女自身は本当に知らないで日本に来て無理やり売春を強要され、人間として扱われてこなかったという裁判でした。そのなかでヤクザが出てきました。

裁判官が、「あなたはどれぐらいの人を売春させたのか。」と聞いたら、「数なんて覚えていない。」と言いました。「あなたは暴力をふるって女性たちを無理やり従わせたでしょう。」と言ったら、ヤクザは何と言ったと思いますか。「そんなことをする必要はない。ベルトで机をバシッと叩いたら女性たちは震え上がった。」と言いました。それはれっきとした暴力です。そういうなかで女性たちは、ママを殺さなければ自分が殺されるかもしれないと思ったのです。

今度は千葉の茂原事件の裁判に行きました。その裁判のなかで女性たちが、夜の夜中に庭の穴掘りをさせられたと言いました。なぜ穴掘りをさせたかというと、徹底的に疲れさせて逃げられないようにするためです。やつと穴を掘ったと思ったら、今度は埋め直せと言われたと女性たちは証言していました。

一九九六年にHELPはスタートしています。そのときから現在に至るまでタイの人たちがたくさん来ていますが、九一〜九三年は日本ではアジアから来た女性たちがピークのときでした。HELPにも九一年は二七〇名、九二年、九三年は年間二四〇名来ています。その四分の三ぐらいは人身売買の被害者でした。HELPは民間シェルターで一番大きいのですが、家族で入れる部屋が六部屋、単身者部屋が四部屋でたった一〇部屋です。それに年間二七〇人を受け入れるということはどれだけ沢山の人が入っていたか。九六年からずっと被害者は、減りましたが、タイのほかメキシコ、ルーマニア、ペルー、コスタリカ、韓国、香港、コロンビアの人たちが増えてきて、最近はいンドネシアの方たちが来ております。なぜかという、インドネシアは地震の津波被害を受けました。そのために日本に入ってきているというのが最近の状況です。

## HELPの利用状況の内訳

HELPの利用状況の内訳ですが、DVが五〇%、ホームレスが七%、人身売買が四一%、いま外国籍のなかで一番多いのはDVです。夫からの暴力によって子供と一緒に逃げてきている人たちが多いのです。人身売買が四一%となっていますが、三〇名以内、最近では二一―二五名入ってきております。

## HELPを利用した女性たちの状況一

彼女たちの借金で最近一番多かったのは六〇〇万円です。私たちですら六〇〇万円というお金を返すのはとても大変です。多くの女性たちは四〇〇万円以上の借金を返さないといけないのですが、返すまでは自由がありません。買い物に行くときも監視されています。逃げたら親を殺すぞとか家に火をつけるぞと脅かされています。これも人身売買の特徴です。

脅迫、暴行、監禁、そしてお客をとるわけですが、だいたい二―三万、泊まりは四―五万、それを一日三―四人、多いときは一〇人と言った人もいました。風邪をひいたりしたときは、それがすべて借金に課せられる。女性たちの証言のなかで、一キロ体重が増えると一万円の罰金というものもありました。何か欲しいものがあれば、すべて借金に課せられていきますから、借金が減らないのです。

一七歳以下の人たちも来ています。一三歳、一六歳、年齢の低い人たちは子供の人身売買ということが世界的な問題になっていますので、そういう少女たちもHELPに来ておりました。一番多いのが二五―二九歳です。そのなかには村に子供を置いてきた人もいます。

## HELPを利用した女性たちの状況二

最近、それほど長く売春しないでさつさとHELPに逃げて来る人たちがいます。自分一人ではなかなか逃げられませんか、お客さんに頼んで逃がしてもらった人もいました。東北から東京までお客さんに助けられて逃げてきた人もいます。最近では入管や警察の手入れで捕まり、そこからHELPに来ています。

## HELPを利用した女性たちの状況三

監禁、常時監視状態などで精神的にも極限状態に置かれている女性も多くなりました。私たちが人身売買禁止ネットワークで言っているのは女性の保護です。国は、人身取引対策行動計画（二〇〇四）と人身売買罪の新設（二〇〇五）しましたから、警察はブローカーたちを捕まえようと躍起になっています。そして、女性を保護したときに、どういうところで働いたのか、どういう人たちがそこにかかわっていたかという状況を警察は聞き出そうとします。しかし、女性たちは、またそこで思い出さなければならぬのです。女性たちの多くはたくさんストレスを抱えています。HELPに來た途端、リラックスして心が回復してくるのです。

## 被害者と病氣

回復したときに何が起るかというと、病氣です。いままで起きたことがないような癩癰や心臓発作やほか、夜眠ることができないというさまざまなことを訴えます。それはストレスを抱えたために出てくる病氣です。

そして、女性たちに何か心配なことはないかと聞くと、HIVにかかっていないか心配だと言いました。それで、私たちはほとんどの女性を病院に連れていっています。人身売買罪や行動計画ができる前はHELPがお金を出して



いましたが、行動計画のなかで被害者は病院の治療がただになる無料低額診療事業を使うことができるようになっていて、近くの病院に連れて行きますと、ほとんどの人が性感感染症にかかっています。でも、早く治療すれば早く治るということで、女性たちは安心して本国に帰国しています。

### 国際組織犯罪防止条約

#### 「女性と子どもに関する人身売買の防止・禁止議定書」

国際組織犯罪防止条約に日本はバリエで調印しました。それによって国際的な人身売買に関する関心が高くなってきました。日本はいままで何と言っていたかというところ、好きで勝手にいろいろな国から日本に売春をするために来た”法律を犯している人たち”と言っていました。日本には人身売買はないと言った国会議員もいました。ところが、「女性と子どもに関する人身売買の防止・禁止議定書」が出たことによって、日本は少しずつ関心を持つようになりました。

#### 内閣府男女共同参加局女性に対する暴力に関する専門調査会の人身売買問題への関心

私は内閣府の女性に対する暴力に関する専門調査会のなかで、人身売買について話をさせてほしいと言いました。二〇〇一年当時、内閣府の調査会は、この問題は国民に周知されていない、早いと言いました。ところが、私は一八八六年から人身売買の問題はH.E.L.P.のなかで起きていると発言しました。

そこにアメリカ国務省の人身売買に関する年次報告が出ました。それぞれの国が第一分類、第二分類、第三分類、監視国に分類され、日本は第二分類の監視国になりました。アメリカは世界の警察だと思っていますから、アメ

リカはどこにも入っていませんが、日本はアメリカによって第二分類の監視国になったから大変です。この問題ととりかからなければならないと思ったのです。急きょ動きました。

### トラフィッキングに関する勉強会

私は内閣府の厚生労働省以外の各省庁の集まりのなかで人身売買の問題を訴えました。そのときにコロンビアの領事とソーシャルワーカーが来ていました。タイ大使館も来ました。コロンビアのソーシャルワーカーは分厚いファイルを持ってきて、これだけ人身売買の被害者がコロンビア大使館に逃げていると言いました。そのファイルを見てびっくりしたのが法務省、警察関係です。

### コロンビアブローカー「ソニー」が逮捕される

そのなかで出てきたのがコロンビアブローカー「ソニー」でした。なぜソニーという名前がついたかというと、ストリップ劇場に女性たちを派遣する日本人のブローカーで、女性の裸の写真を撮るときにソニーのカメラを使ったからです。内閣府の会合のときに、コロンビア大使館がソニーを捕まえくださいと言って、警察が動き始めました。

### ソニーの逮捕

二〇〇三年にソニーが捕まりました。そのときに私たちはソニーの裁判に行きました。その裁判のなかで、ソニーは、コロンビアの女性たちが搾取されないように自分がお金をコントロールしているので、女性たちを搾取したわけではないと言ったのですが、HELPに來た女性たちはソニーに歯を折られたり、ものすごい暴力を受けたりしまし

た。ある女性はソニーとチンピラによって輪姦されて妊娠してしまった。コロンビアの女性はカトリックの方が多いので、その女性は子どもを生むかどうか、HELPにいる間本当に悩みました。しかし、そのブローカーの子どもはどうしても生みたくないくことで、子どもを生むことを諦めました。ソニーはストリップ劇場で女性を裸にするだけではなくて、そのなかで女性たちをひどい状況に置いたわけです。

## ソニーの裁判

ソニーが捕まって裁判が終わりました。ただし、その裁判の刑は一年一〇カ月です。何百人という女性たちを使い、たくさんのお金を儲けたはずです。それで、入管法違反、職業安定法違反でたった一年一〇カ月です。なぜだと思いませんか。人身売買罪という法律が日本にはないからです。日本では売春防止法が五〇年前にできました。そこには、売ってはならない、買ってもならないと書いてあります。この法律でなぜ捕まえないのか、と警察に言ったら、「処罰規定が何も無い。」ただし、女性は捕まるのです。特に外国籍女性は街角で勧誘していたら、売春防止法(五条違反)という形で捕まります。ホテルに行ったら女性だけが捕まって、男性はおかまいなしです。それが日本の法律です。人身売買罪がないので、ソニーのような、ブローカーは、たった一年一〇カ月で出ています。

## 人身取引対策行動計画(二〇〇四年二月)と人身売買罪の新設(二〇〇五年六月)

私たちは人身売買罪でブローカーを処罰してほしいと訴え、一方では女性たちに対する保護を訴えました。そして、人身取引対策行動計画が二〇〇四年二月、人身売買罪が二〇〇五年六月にできました。政府では人身売買と言わず、人身取引、英語ではTrafficking in PersonとかHuman Traffickingと言われていますが、みんな同じです。私は、女性を

モノと同じように売買するという意味で「人身売買」という言葉をこたわって使っています。

そのなかで人身売買のいろいろな取り組みがなされています。女性たちが帰国するときはIOM(国際移住機関)がお金を出してくれるので無事に帰ることができます。しかし、帰っても何も仕事があれば、その女性たちはまた日本に来る可能性がありますから、国を超えたネットワークキングが必要になります。いろいろな国と人身売買に関する協定が必要ではないかと思っています。

最近、HELPのタイ人スタッフに、帰国したタイ人女性からお世話になりました、とわざわざ電話がかかってきました。どうしているのと聞くと、家にブローカーが来ているので怖くて家に帰ることができなくて友達のところにいるけれども、仕事がないからもう一度日本に行こうかと考えていると言うのです。そんなことをしたらまた同じことの繰り返しです。

#### タイにおける人身売買に関する取り組み

それで、私は八月に人身売買禁止ネットワーク(JNATIP)の人たちとタイに行きました。タイのなかでどのような取り組みをしているのか、タイの政府はどのような対策をしているのか、NGOはどのようにしているのか、民間のシェルターでどういうことをしているのかを視察に行きました。タイには人身売買に関する人間の安全保障者人権局があり、人権委員がいて人身売買問題への取り組みを日本より進んでやっていると었습니다。

なぜかというと、被害者が最近多いからです。政府は、まずブローカーを捕まえることだと言いました。一三歳の少女を人身売買したブローカーが捕まって、日本では三年ぐらいの刑だと思えますが、二一年の刑を受けている。一八歳以下の子どもが人身売買をされると刑は重くなっています。

チェンライの職業訓練センターにも行きました。そこで二〇〇人ぐらいの人が六カ月間職業訓練を受けるそうです。そこで職業訓練を受けた女性が出たときには何らかの仕事ができる。ですから、甘い誘いに乗らなくても、ちゃんとした仕事がその国のなかで得られるということです。

私はそういう場所に行つて、日本でも何かしなければならぬと思いました。日本でも職業訓練所があります。しかし、人身売買の被害者がそこに入ることはできません。人身売買の被害者の方に関しては二〜三週間緊急シェルターにいたのちに二〜三カ月、そして加害者を訴えたいという人はもつと時間がかかりますから、そういう場所をつくってほしいということをおっしゃいます。

### 人身売買に関する具体的対策

一 ページをごらんください。人身売買に関する具体的な対策がないといけないと思います。加害者処罰、多くの女性たちは警察や入管、そして大使館に来て保護されますが、ほとんど人たちが入管で取り調べがあつたのちに、加害者が裁判で処罰になる前に帰つてしまします。それを国はどう言っているかというと、女性たちはほとんど帰国したいと言っている。しかし、「あなたは日本にいて加害者を処罰するための裁判に協力するならば、その間こういうサービスを受けることができるというような選択肢が与えられましたか」と聞いたたら、ほとんど何もありません。ただ、人身売買の被害者と認定されれば特別在留資格が出ます。その在留資格も、いろいろな取り調べがすんで帰る直前に出るので。そういう状況ではちゃんとした被害者救済にはなりません。

アメリカやイギリスの取り組みはもつと進んでいます。イギリスでは加害者を訴えたいと言つた人は一年間はそのシェルターのなかにいることができるそうです。そして、そのシェルターに国から億というお金が出ているそうです。

H E L Pには国からのお金は一銭も来ていません。そういう意味での違いがあります。

専門機関を新設してほしいということを私たちは訴えております。専門機関を設けて、そのなかで女性たちの心のケアをしていく。いま現在、婦人相談所で心のケアはどういうふうになされているかというと、入ってきたときと帰るときに通訳をするだけです。それでは心のケアにはなりません。

H E L Pでは外国籍の人が入ったら、できるだけ早く母国語で対応することになっています。なぜそうするようになったかというと、警察に駆け込んだタイ人から電話を受けたことがあります。私はその女性に、警察があなたを安全なところに連れて行ってくれます、と伝えました。ところが、その女性がH E L Pに来たときに運悪くタイ人のスタッフがいませんでした。

私は一步遅れて着きました。着いた途端に寮母さんが、大変なことが起きたと言うので聞くと、お昼時で、ほかの国の人たちが入って来て、寮母さんに向かって、「ママさん」と言ったのです。女性が怖いのは「ママ」です。その女性は転売されたと思ったのです。売春をしてやつと借金を返したと思うと、ママが新しいところに売って、転売された女性はまた借金が一から始まるのです。女性たちが一番怖いのは「ママ」、そして「テンバイ（転売）」です。

タイでは警察官が置屋やっているということがありますから、警察官も信用していません。それで、彼女は台所に入って包丁を持ち出して、ママさんに向かって、もし何かあったらあなたを殺して私も死ぬ、という格好をしたのです。肝の座ったうちの寮母さんが、「やるんだったらやりさない」とポンと言ったらその女性は正気に戻りました。そういう状況が起こる可能性があるということで、ここは民間のシェルターで安全な場所だ、あなたたちの先輩がたくさん入って無事に帰国したということをしてできるだけ早く母国語で伝えるようにしています。

言葉は心のケアになります。最初に女性たちがいかに心の問題を持っているのかということを聞かなければならな

いと思っています。私はHELPでも十分にケアができているとは思っていません。そういう意味でこれから被害者の救済が大切になります。

民事裁判の保障ですが、ブローカーを訴えるかたわら、民事で自分の働いた未払い賃金を取り戻す可能性を探ることです。女性たちに、あなたが働いたお金を取り戻せるかもしれないと言ったら日本にいると思います。東京で起こった新小岩事件では、捕まったブローカーやママさんたちが刑務所に入っている間に、ブローカーやママさんを訴えてお金を取り戻したことがあります。ですから、それができないことはないと思います。しかしながら、それを民間のシエルターや団体がやるだけではなくて、国がそれに関与しなければならないと思っています。

そして、IOMがグレイゾーンの女性にも帰国支援をする必要があります。ママさんからお金をもらったら被害者とはならないと警察が思う可能性がある。その人たちをグレイゾーンと言います。しかし、お金をもらったといっても、ほんの一部しかもらっていないのです。そういう意味でグレイゾーンの人も被害者として認定してほしいと言っているわけです。

啓蒙教育、これから皆さんに関係があります。買春は女性の人権侵害である。この需要の問題がなくならない限り人身売買の問題はなくならないと思っています。女性の性の安全を守ることが、男性の性の安全を守ることにもつながってきます。例えば、買春するときにほとんどの男性はコンドームを使うことを嫌がるそうです。それがいやだと言えば、またママから借金を課せられたり暴力を受けたりするので聞かざるを得なかったと言います。多くの日本人男性は女性から感染したと言いますが、女性たちは男性から感染させられるのが怖いと言います。

タイではHIV教育は一五年前から始まっています。HIVを防止するには注射の回し打ちをしない、不特定多数の人と性交渉をしないということが小学生の子どもたちにもきちんとインプットされています。タイではそれぐらい

HIV教育は進んでいます。自分の健康、家族の健康を守ることをしつかり考えていかなければならないということをタイの教育にならってほしいと私は思っています。それが女性に対する暴力の防止につながっていくからです。

## 二〇〇六年四月以後の人身売買に関する民間シェルターの動き

今年度は人身売買の被害者は一人もシェルターに入っていない。法律が決まったことによって、昨年は一二一人の被害者の女性たちが婦人相談所に行きました。婦人相談所を通してHELPに保護されれば、委託費・一日六四〇〇円プラス通訳費が入ってきます。ところが、あまりにもそのお金がかさむので婦人相談所が自分たちで保護しようとしているのですが、いままで外国籍の女性たちを保護したことがない、人身売買の女性たちを保護したこともない。ところが、法律によって保護しなければならなかったことで保護しているのですが、私が調査に行きますと、まだまだ取り組みが遅れています。そういう意味では公と民が協力しないとこの問題は解決していかないということを政府に訴えていこうと思っています。

人身売買禁止ネットワークでは婦人相談所に聞き取り調査をして、来年ぐらいにはその調査報告ができます。この問題は外国籍女性だけの問題ではなく私たち日本人一人ひとりの問題であると考えて、意識をもって取り組んでいただければうれしく思います。(拍手)